



一生懸命がかっこいい

～みんなが主役！笑顔あふれる原小オリンピック～

校長 桃井 陽子

原小オリンピックの前日、27日は、雨が午前中まで少し残っていましたが、午後はその雨も上がり前日準備を予定通り行うことができました。応援のリハーサルの声が運動場に響き渡り、会場づくりも進みます。風が吹くと、乾いた砂が舞うような運動場は適度の水を含み、ベストコンディションで28日当日を迎えました。

開会式で今年も3つの「一生懸命」を期待する、という話をしました。

一つ目は「自分の力を出し切る」。子どもたちは、学年の演技や競技、応援練習、全校種目、高学年を中心とした実行委員会の仕事を一生懸命練習したり準備したりしてきました。準備してきたことを自分の力として、その力を出し切り最後までがんばること。

二つ目は「力を合わせる」。いろいろな仲間やペア学年、地域の方とふれあいながら、力を合わせ、心を通わせてがんばること。

三つ目は「応援」。お互いの応援を精一杯がんばること。

ゴールめざして前へ前へと歯を食いしばり、手を振って懸命に走る子どもたち。バトンを握りしめ、つなぐために必死に走る子どもと、バトンを受け取るために仲間の走りをじっと見守る子ども。バトンをつなぐということは、心をつなぐこと。

1年生の「Let's 原の子インベーダー」6年生に作ってもらったポンポンをふりながら、リズムに乗ったかわいらしい動き。2年生の「ジャンプ！～とびきりの世界へ～」しっかりと手を振った入場、体いっぱい使った大きな表現ととびきりの笑顔。3年生の「鳴子」リズムに乗って鳴子を打ち鳴らす。「ヨイヤサノヨイヤサノ！」というかけ声、そして気持ちよい駆け足の退場。4年生の「エイサー」太鼓の音に合わせ、曲の雰囲気をつかんでゆったりと動く姿。工夫を凝らした入退場。5年生「絆」集団行動。整然とまたリズムカルに。お互いに動きを確かめ合いながら一つの集団の動きをつくる、個が生きて集団の美しさに。6年生「ソーラン」堂々とした入場。低い構えの姿勢から始まるダイナミックな動きとはっぴを翻す誇らしげな顔。みんながめざしあこがれる学校のリーダーの姿。

きびきびとした動きの応援団による、500人対500人の熱のこもった応援合戦。1000人パワーの声。互いの健闘を誓い合うエール交換のすがすがしさ。競技中の力強い応援。自分の役割をしっかりと責任をもって果たした開閉会式。本部席の前を「失礼します。」と言いながら腰をかがめて通る子ども。

自分の種目の出番はもちろんのこと、自分の役割やその場の状況を考え、それを意識してがんばろうという真剣さや優しさが、子どもたちの姿に表れていました。子どもたちの一生懸命が運動場いたるところで輝いていました。本気でがんばる姿は、人に感動を与えます。正にそれが「一生懸命がかっこいい」のです。

今年度は赤組が優勝しましたが、その勝ち負けを超え、1000人の「一生懸命」が集まって、すばらしい原小オリンピックになりました。子どもたちには、精一杯やるのが気持ちよいこと、一生懸命がんばるからこそ、充実感や達成感につながることを、これからの学校生活の中で生かしてほしいと期待しています。

保護者の皆様、地域の皆様、原小オリンピックでの様々なご協力と子どもたちへのご声援、ありがとうございました。



土壌を大切に

副校長 高嶋 聡

梅雨空のもと、校庭ではアジサイが色鮮やかに咲き誇っています。

「七変化」と辞書で引くと「アジサイの別名」という記載があるほどアジサイの花の色の変化は昔からよく知られています。株によって青・紫・白・ピンクと様々な色がありますが、同じ株でも咲き始めから水色→青→青紫→赤紫と花の色が変わることもあるそうです。

アジサイの花の色の違いや変化は、主に土壌に原因があり、土壌が酸性だと青や青紫、アルカリ性だとピンクや赤紫になるようです。植物が吸収するアルミニウムの量が土壌の酸度によって変化して花の発色が変わるので、土壌の酸度を調整することで意図的に花の色を変えることもできるそうです。ちなみに、原小学校のアジサイの花は、正門近くは白や青色で体育館裏や校庭は赤紫色をしています。

同じ植物でもどのような土壌で育つかによって、咲く花の様子が違うというのは興味深いことです。

私は、子どもたちについても同じようなことが言えるのではないかと考えています。子どもたちがどのような土壌（環境）で育つかによって、咲かせる花（成長の姿）は違ってくるのではないのでしょうか。家庭、学校、地域等、子どもたちは様々な環境の中で日々を過ごしています。子どもたちの成長のために、より良い環境を整えてあげたいという願いは、保護者の皆さんも学校も、そして地域も同じだと思います。

私が学級を担任していた時、4月の学級のスタートで必ず子どもたちに伝えていたのは、言葉の大切さです。学級の言語環境（土壌）を整えることを必ずします。相手の心を温かくする「ふわふわ言葉」と相手を傷つける「ちくちく言葉」について子どもたちと一緒に考えます。言葉はキャッチボールですので、自分がどのような言葉を相手に使うかによって、相手から返ってくる言葉も当然変わるといことも伝えます。そして、絶対に使ってはいけない言葉については、学校でも家でも使わない約束を全員としてきました。

子どもたちの言語環境を整えることで、子どもたちの関係も自然と良好なものになっていくのをこれまでの経験の中で実感しています。子どもたちの言語環境には、当然まわりにいる大人たちの言葉も含まれます。子どもは、大人が使っている言葉は使って良いものと認識します。教師も含め、大人が使う言葉も子どもたちの成長に大きな影響を与える大切な土壌の一部なのです。気を付けていきたいものです。

原小学校でも、子どもたちを育む土壌づくりをこれからも大切にしていきます。言語環境だけでなく、人、物、食など子どもたちと関わる様々な環境がより良いものとなるように努力してまいりたいと思います。引き続きご協力をよろしくお願いいたします。



自分に、挑戦！

校長 桃井 陽子

学校に子どもの声が戻ってきました。前期後半がスタートした29日はあいにくの雨。傘を差し、もう片方の手には大荷物、班長さんが列を気にしながらゆっくりと歩く、そんな登校の風景でした。「おはようございます。」子どもたちの元気のいい挨拶に、エネルギーをいただきました。教室を回ってみると、夏休みの宿題を確認しながら集めていたり、席替えをしたり、あるいは転入してきた仲間に自己紹介をするなど、それぞれのクラスの表情があり、教室も喜んでいました。

さて、この夏はリオデジャネイロオリンピックがありました。睡眠不足と格闘し、それでもライブで競技を見たいと、眠い目をこすりながらテレビに釘付けになっていた方も多かったのではないのでしょうか。陸上400mリレー決勝での山縣亮太さん、飯塚翔太さん、桐生祥秀さん、ケンブリッジ飛鳥さん4人の見事なバトンワークの末37秒60のアジア新記録で見事に銀メダルを獲得しました。アンカーのケンブリッジ飛鳥さんがウサイン・ボルトさんと走る姿には思わず興奮してしまいました。歴史的なメダルが相次ぎ、感動にわいたオリンピック。結果的にメダルに届いた選手、惜しくも届かなかった選手がいましたが、どの選手にも、それぞれオリンピックに出るまでの想像を絶するような血のにじむような努力、地道な練習、プロセスがあり、その中で夢の実現に向かって果敢に自分に挑戦する姿、チーム一丸となって競技に打ち込む姿、また、その選手を支える周りの存在にも心を打たれました。2020年(平成32年)はいよいよ東京オリンピック・パラリンピックです。ゴールは新たなスタートライン。選手のインタビューで、すでに目標を東京オリンピックにおいている言葉が多く聞かれました。4年後の夏への期待がふくらみます。

その2020年度(平成32年)は次期学習指導要領が全面実施の予定になっており、その改訂の方向性が示されています。子どもたちに、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために必要な知識や力を確実に備えることのできる学校教育が求められています。個人が自己の責任において、主体的自立的にしなやかな感性をもって自己決定する時代と言われる中、オリンピック選手たちが張り詰めた緊張感を感じながらも、ここ一番でもてる力を出し切る姿や最後まであきらめない精神力や集中力、周囲を気遣う言葉に、これからの国際社会を生き抜いていく子どもたちのすばらしい未来の姿を見るように感じました。

私は、どんなことでもいい、自分に挑戦し、がんばるプロセスを大切にして自分を鍛え、自分を高めていってほしいと思っています。そして、挑戦した結果が必ずしも思い通りでなくても、そのわけを振り返り、自分の未来につながる学びとして、そこからまた、新たな挑戦をすればいいと思うのです。何に、どうがんばっているのか、何を課題としているのか、一人ひとりのがんばりを見取り、価値付けることのできる学校でありたいと思います。